

「北里記念医学図書館」80年のあゆみ

たち たづこ
館 田鶴子

(慶應義塾大学病院事務長付)

1 医学図書館のはじまりからIMIC発足まで

北里記念医学図書館は1937年10月、初代医学部長として慶應医学の基礎を創った北里柴三郎の功績を讃えて「北里博士記念医学図書館建設会」により寄附金を募って建設された。1944年3月、同建設会から慶應義塾に管理及び経営の一切を寄付されて以来、「北里記念医学図書館」(以下「当館」とする)の名を永久に保存すること、医学者一般に公開すること等を条件とした覚書を遵守して、竣工時からの図書館名を名乗り続けている。2階には北里講堂、会議室等の設備を持ち、今もなお、和田順顯設計による近世復興式の外観を保って現在に至っている(図1)。



図1 開設当時の北里記念医学図書館玄関ポーチ

一方、運営組織は時代とともに変遷した。慶應義塾大学研究・教育情報センター構想による図書館組織の再編成が実施されたことにより、1971年に組織名が医学情報センターとなり、1993年にはメディアネットワーク発足とともに医学メディアセンターへ、2004年には信濃町メディアセンターとなった。

当館は戦災による図書の焼失ほか、大きな打撃を乗り越えて近代化を進めた。復興を支えたのは、ロックフェラー財団、チャイナメディカルボードほか海外諸団体からの寄付、資金援助であった。同時に職員教育の推進、参考調査系の独立、文献調査を中心としたレファレンスサービスの確立等、活動は加速していった。当時、国内初の試みを次々と実現していったが、特筆に値するのは、米国国立医学図書館(NLM)の開発したMEDLARSへの国内医学文献の索引提供という国際事業を1966年に手掛けたことである。業務としてドキュメンテーションを開花させて、国際原子力情報システム(INIS)や米国大気汚染技術情報センター(APTIC)への文献情報提供という国際協力活動への展開も見られた。

業務の飛躍的な拡大は人員増を生み、従来の組織では円滑な遂行が困難な域に達したことから、1972年4月に情報サービス部門を分離して、新しく国際医学情報センター(International Medical Information Center) (以下「IMIC」とする)を文部・厚生省認可のもとに発足させた。MEDLARS, INIS, APTICなどの先進的な情報サービスから複写サービスにまで広範囲な情報提供が別組織で運用・提供されることになり、現場では混乱がしばらく続いたが、1974年以降、種々の調整を行い、徐々に収拾に向かった。1979年4月に当館において学内利用者に対してJOISによるオンライン文献検索サービスを開始し、情報サービス復活のひとつの転機となった。一方IMICは独自のライブラリを持ち、医学・薬学・医療に特化した専門情報サービス機関として現在も貴重な存在であり続けている。

2 第5回国際医学図書館会議、当館開設50年記念式典、開設60年記念祝賀会

1985年秋に日本で開催された第5回国際医学図書館会議において当館は中心的役割を果たしている。1983年2月から日本組織委員会事務局へ場所を提供し、本会議に先立って実施された見学会では、当館でも10か国から44名の外国人の来訪を受けた。

開設50年記念式典は1987年10月、前年に完成したばかりの病院新棟11階臨床講義棟で行われた。シンシナチ大学医学情報センターのNancy M. Lorenzi氏が「IAIMS (統合型学術情報管理システム) — 明日へ向けて —」と題する招待講演を行い、それに続く祝賀会では図書館棟2階の北里講堂で約160名が歓談した。開設50年を記念して『慶應義塾大学医学情報センター (北里記念医学図書館) 50年の歩み』『医科大学における学術情報マネジメント』(翻訳)を出版した。

開設60年に当たる1997年には、記念絵葉書セットを作成し、館報「きたさとニュース」に「60年のあゆみ」を載せ、「医学部病院ニュース」、「医学部新聞」にも関連記事が掲載された。図書館入口正面の展示ケースには開設期の書類史料、貴重書やリプリント版を飾り、記念祝賀会には90名を超える関係者が参加した。

3 蔵書の充実と業務の機械化

1971年に研究・教育情報センター組織へ変わって以降、図書予算増とともに資料受入点数が右肩上がりが増えていった。手作業による重複調査では追いつかない現状から、1980年に収書のコンピュータ処理を独自開発し (MELIC-ACS)、重複調査、受入れ登録、会計処理を機械化した。1991年12月には他キャンパスに先行して新システムKOSMOSへ移行した。OPACを含めた全面稼働は1993年であった。

更に1985年以降は急速な外国為替の円高もあり、外国雑誌の購読数や洋書購入点数は飛躍的に増えていった。蔵書数は1985年の約17万8千冊から、2005年には約37万8千冊と20年間で増倍し、国内有数の医学・生命科学専門コレクションを構築した。そのことは相互貸借の受付件数の多さにも表れる。往復はがき、テレックス、FAX、NACSIS-ILLと通信手段も進化しながら最盛期には年間受付件数は2万件を超えた。

バックナンバー購入も一因となって蔵書規模が拡大した半面、書架不足は深刻となった。1990年代前半に蔵書は25万冊を超え、館内は窓際まで書架で覆いつくされていた。この状況から脱却するため、全キャンパス共同利用施設として建設された遠隔の保存書庫「山中資料センター」へ第1期の資料移動を1994年に実施した。2006年にはキャンパス内にあった保

存書庫撤廃による大掛かりな二次資料の除籍・廃棄と資料移動を実施した。直近では2017年8月、7回目の資料移動を行い、全蔵書約42万4千冊中、山中資料センターにはほぼ半数の約20万冊を所蔵する。

4 オンライン情報検索の変遷及び電子情報源

1979年のJOISによるオンライン検索の導入以降、1980年代は図書館員によるDIALOG、BRS他、種々の文献検索代行サービスが最盛期を迎え、当館職員にとってはスキルアップの機会でもあった。1990年MEDLINEのCD-ROM検索サービス導入後はエンドユーザが検索するスタイルが一般化していった。1995年以降慶應義塾情報スーパーハイウェイが整備されると、インターネットを介してのデータベース検索の時代に突入し、研究室や自宅からも文献検索が可能となった。理工学メディアセンターのUNIXサーバ運用によるCurrent Contentsに続いて、1996年にMEDLINEのオンライン検索サービスが使えるようになった。学内サーバでの運用は1999年で中止となったため、WebサービスのOvid Onlineを導入した。1997年に無料公開されたPubMedが全世界的な医学・生命科学情報インフラとして確かなものとなった段階でMEDLINEはPubMedでの利用のみとした。国内文献についてはJOIS国内医学文献ファイルの利用が先行したが、医中誌Webを2001年に導入後は歴史ある医学中央雑誌を使ったオンライン検索が主流となった。

1990年代後半から2000年代前半はHighWire Press等に始まる電子ジャーナルの充実発展期であり、この電子化の波は図書館蔵書の姿を大きく変えた。国内医学雑誌では大型パッケージであるメディカルオンラインを2003年に導入した。雑誌に止まらず、Access Medicine, UpToDate, Micromedex, MD Consult (後のClinicalKey) 他、主要な電子情報源を国内他機関に先立って契約し、研究、教育・学習、医療現場に密着した情報サービスへつなげている。2006年のリモートアクセス導入以降、情報入手の利便性はさらに高まった。

図書予算は2005年度から2015年度まで全く増減はなかった。但し、図書資料費 (電子情報源購入予算) の占める割合は2005年当時30%程度だったものが2015年予算では90%を占めるまでになった。このため値上がりと為替変動の影響を受ける海外の電子情

特集 北里記念医学図書館80年：これまで、そしてこれから

報源パッケージの購読を維持することが困難となり、教授会で図書予算増額を塾執行部に訴える署名嘆願書の提出が決議され、結果的に関係理事の理解を得て2016年に大幅な増額が認められた。

外国雑誌契約が電子ジャーナルのみとなり、契約上、卒業生サービスに支障を来すようになった。この対策として2006年にWalk-in PCを設置して便宜を図った。2017年現在2台で運用している。

デジタル化とネットワークは教育へも大きく影響を与えた。2013年度から医学部による学部2年生へのiPad配付と教育IT化推進事業へ協力して、医書出版社3社と日本語の電子教科書利用実験を3年間にわたって行い、学生からのフィードバックを共有した。解剖学・生理学授業では3D画像を使ったデジタルな教育環境がすでに存在していたことからiPadで読める電子教科書は学生にも受け入れやすいものであった。但し、妥当な価格設定という観点からは更なる検討が求められた。この事業によってキャンパス内無線LAN環境整備が飛躍的に進み、当館も全館にわたって無線LAN環境が整備された。

5 館内アメニティの向上を目指して

開設50年記念を迎える1987年頃より、図書館建屋の老朽化から増改築あるいは新図書館建設を訴える声は多々あった。特に横山哲朗所長、加藤隆一所長は図書館増改築を熱心に訴えた。しかしながら研究棟、教育棟の建て替えが急務であったことから図書館建設の声は通らなかった。

現実的な対応として館内改修を地道に進めた。1994年から1996年にかけて、書庫内の電源増設、1階閲覧室及びカウンター周辺の床上げ、タイルカーペット敷設、空調、照明の改善、塗装工事、さらには地下事務室の照明、空調の改善、床改修、壁面塗装といった一連の工事の実施により、施設環境が一新された。

1997年には永年の懸案であった書庫の空調工事が完了し、昔ながらのスチーム暖房を中止し冷暖房が完備された。また、1998年には図書館外壁補修工事を3か月掛かりで実施し、その夏には書庫内を大改修して利用環境は大きく改善された。開設以来利用されてきたおもむきのある書庫棟のエレベーターも2002年3月に役目を終えて現在のエレベーターに交換された。

2000年代に入り、窓際から順次、個人掛けのキャレルを増やしていった。2001年には1階閲覧室の一部の大机閲覧席にも情報コンセントを設置した。2008年、1階奥の参考図書棚隣の閲覧席をすべて大机から個人キャレル席へ変更、電源と情報コンセントを装備した。2010年には地下閲覧室の大机を1階同様に電源と情報コンセント付きのキャレル席へ変更し、「静かエリア」と名付けた。2009年、1階閲覧室のカーペットを張り替え、2010年には、地下閲覧室と書架間通路に新規にカーペットを敷いた。キャレル席とカーペット効果は大きく、アメニティに敏感な学生にとって好ましい学習場所となった。このほか、2008年から2010年にかけて、書庫棟の床補修と窓際テーブルの交換、地下会議室（倉庫兼）のグループ学習室への改修などを実施した。

2012年には遺贈による寄付金を使用して1階新着雑誌コーナーを全面的に改修し、入館ゲート左手に広がる空間に「くつろぎ閲覧エリア」を開設した（図2）。



図2 くつろぎ閲覧エリア

表紙の見える書架棚、快適なソファ、スツール、アームテーブル付き椅子等を配置しゆとりの空間を創った。この遺贈者はかつて当館をよく利用された他大学の研究者であり、その遺言「学外に開かれたメディアセンターの確立のために寄付をいたします」の言葉とともに寄付された篤志家であった。

2012年には信濃町インフォメーションテクノロジーセンター（以下「ITC」とする）が長く利用していた地下事務室跡地を改修して、新たにセミナー室（利用者用パソコン18台設置）を開設するとともに、続き部屋にグループ学習室を移設して改装オープンした。2014年2月には、閲覧カウンター、レファレンスデスクの取替え、及びカウンター周辺の改修工事により働きやすい環境も整えた。また、東日本大震

災以降、照明器具の間引きによる節電をしてきたが、2015年度以降、LED照明への切り替えを順次実施している。

建屋についても2015年2月から3月にかけて、耐震補強工事が施工され、建物外観を壊さず強度を高めるために一部の窓が壁となった(図3)。倉庫棟との間にある光庭を潰して造作された部屋、永年職員に愛用されてきたスタッフルームはこの機会に施設構造上の安全を優先して解体された。

老朽化した建物であるが、繰り返しの改修工事と什器の刷新によってサービス機能を補い、館内アメニティの向上に努めている。



図3 耐震補強工事後の外壁

6 パブリックサービス及び情報リテラシー教育

閲覧業務に関する特記事項は2005年4月の業務委託導入がある。義塾の週休2日制移行時に職員の働く環境を考慮しつつ、週末、夜間の安定的なサービスを目指した。2009年度には委託先の変更に合わせて、年間を通じて土曜、日曜を全面開館とした(従来は第3土曜、8月中の日曜は休館)。委託の対象業務は閲覧・複写・書庫管理に及ぶ。委託を導入した頃から購入資料は急激に電子へ傾き、紙資料を扱う業務の比重は減っている。

2011年3月の東日本大震災では約5万冊の落下があったが、図書館員、委託スタッフだけではなくIMICからの応援を得て1週間で完全復帰した。大震災以降は義塾の節電対策を受け、夏期臨時休館を実施し当初は2日間、2013年度以降は7日間を休館としている。開館時間については1986年に研修医の総意として提出された要望書を受けて、平日の開館時刻を午後8時から9時へ1時間繰り下げて今日に至っている。

複写に関しては1997年に初めてセルフコピー機を

複数台設置し、図書委員会のたびに話題になっていたオペレーターコピーの複写料金が高いことへの対策を施した。

1994年、医学部のカリキュラム変更に合わせて本格的な情報リテラシー教育が授業支援の形で始まった。1996年度にキャンパスにおいて「基礎医学特論」が3年生科目として新設された。全31テーマの中のひとつとして「医学文献情報概説」を図書館員が担当した。1コマ90分の授業を10コマ行い、終了後には4段階の評価をした。図書館員が教育に参加し学生に接することの意義は大きい。初年度の内容は1) 医学医療情報概説、2) 情報検索演習、3) 情報組織化演習、4) インターネット・ベーシックス、5) 医学医療情報をめぐるトレンド、以上を各2コマずつ実施した。当時はUNIXワークステーションの利用が始まった頃であり、情報システムサービス(現在のITC)と協力して授業を組み立てた。授業への参加人数は10名から20名前後と年によって差があった。2004年度カリキュラム変更の際も自主選択科目の中で同様に「医学文献情報概説」を継続した。2008年度カリキュラム変更では、自主選択科目「医学文献情報1(基礎)」「医学文献情報2(応用)」(選択10コマ)を担当することになった。後に1. 基礎、2. 発展と名称を変えた。また、自主選択科目「EBM入門」への授業支援も行った。2012年度の新カリキュラムへの移行に当たっては、3年生対象に「医学文献情報の基礎」を医学統計・医療情報の授業の中で実施し、4年生へは「医学文献情報・臨床編」を診断学実習の授業の中で実施して現在に至っている。いずれも必修2コマを担当している。学生全員へ情報リテラシー教育を行うことの重要性を教員が認めてカリキュラム編成への配慮があることは図書館員にとって大変ありがたい。看護学分野では、看護医療学部の前身である看護短期大学時代に1年生、2年生の授業(各2コマ)を担当し、健康マネジメント研究科に対しては「臨床入門」への授業支援の実績がある。

パブリックサービスの展開は利用スペースのゾーニングの変化にも表われる。1994年にパソコンエリアを設置し、CD-ROM文献検索やパソコンを使ったスライド作成機を配置した。1999年には1階閲覧室の中央にあったカード目録を撤去し、パソコンエリアを拡張している。なお、情報の発信とナビゲー

特集 北里記念医学図書館80年：これまで、そしてこれから

ションに必須の信濃町メディアセンターWebサイト公開は1996年のことであった。

日本医学図書館協会（以下「JMLA」とする）関連で特筆すべきは1964年に東京大学から洋書総合目録カードの編纂を引き継いだことである。以降、目録カードの維持管理と所蔵館照会サービスをJMLA「医学文献センター」の仕事として行い、全国からの問い合わせに対応してきた。ピークであった1980年前後の照会件数は年間3,000件を越えていた。JMLAは1980年以降、冊子体『医学洋書総合目録』を編纂、発行した。その後NACISIS-CAT/ILLの利用へと変遷した結果、「医学文献センター」の管理する目録カードは所在目録としての役割を終え、JMLA理事会の承認を得て2011年にすべてのカード目録を廃棄した。

研究支援の取り組みとしては、他部署との協働作業で1995年に始まった医学部研究業績データの収集とデータベース化がある。教室ごとにデータを収集し初期の3年分（1995-1997年度）を「慶應義塾大学医学部研究情報データベース」としてCD-ROMで医学部に配付した。2002年4月にはWeb版へ移行し、Webサイトの案内から外部サーバへリンクして検索とダウンロードを可能とした。2004年、大学全体で慶應義塾研究者情報データベース（K-RIS）を開発するに当たり、医学部の業績データを統合して一本化した。これによりWeb版の医学部研究業績データベースは2014年3月に公開を中止した。

7 健康情報ひろばの開設とKOMPAS公開

慶應義塾大学病院（以下「慶應病院」とする）では2009年1月に病院外来のくすり待合いの一角に患者さん向け情報コーナーとして「健康情報ひろば」（以下「ひろば」とする）を開設した。慶應病院の理念を実現し、インフォームドコンセント（説明と同意）に役立つ情報提供を支援することを主目的としている。¹⁾ 慶應病院が発信するオリジナルコンテンツで構成されたKOMPAS: Keio Hospital Information and Patient Assistance Serviceも同時に公開した。ひろばの運用及びKOMPAS編集のための運営委員会の事務局を図書館員が担当する。2016年1月以降はKOMPAS編集委員会を組織し、教員5名と事務局で記事の企画、編集に当たっている。ひろばには、病気、検査、くすり、栄養に関す

る図書（約600冊）、雑誌（数種）、パンフレット（約200種）、KOMPAS利用を主目的としたパソコンを置き、くすり待合いに設置されたディスプレイでは慶應義塾が所蔵する貴重資料をテーマにした動画展示（慶應義塾大学デジタルライブラリーチャンネル）を行っている。情報探しを手伝うボランティアが月曜から金曜まで常駐し（午前9時～午後3時）、図書館員は資料の選定と購入、パンフレット手配、ボランティアの管理等を行う。オープンスペースでの運用という特徴を持ち、資料やKOMPASの閲覧に限らず、机、椅子、ソファを多目的に利用できる空間となっている。一日の利用件数は100名を超える。また、資料購入に関しても2012年度以降は患者さんからの病院備品指定寄付金で賄っている（図4）。



図4 健康情報ひろば（2016年1月撮影）

KOMPASは慶應病院の医師ほか医療専門家が執筆した記事（2009年開設時約570項目、2017年現在約750項目）を収録した医療健康情報サイトとして2010年3月にインターネットを介して一般公開された（<http://kompas.hosp.keio.ac.jp/index.html>）。2012年11月に早期にスマートフォンに対応して利便性を高め、2014年7月以降はリニューアルされた病院Webサイトと密に連携している。現在、毎月のアクセス数は40万件に達する。「あたらしい医療」や「慶應発サイエンス」のコラムでは毎月新規の記事を掲載して先進的な慶應医学・医療を一般市民にわかりやすく紹介し、広報の面からも重要な役割を担う。慶應病院では2017年7月に日本医療機能評価機構が行う病院機能評価を受審したが、サーベイヤー講評において、ひろば及びKOMPASのサービスは高い評価を受けた。

8 歴史的資料とデジタル化

医学部史料委員会は医学部に関する写真を中核とする歴史を物語る史料の保存を目的に1990年10月に医学部長発案で組織された。当館はその事務局として活動している。1996年に公開された「慶應義塾写真データベース」にも委員会の保存する写真が多数収録された。医学部卒業アルバムについては2016年度より保存用のデジタル化を順次行っている。2011-2012年度にはかつて存在したフィルムライブラリーに所蔵していた腐食の進む16ミリフィルムから選択的に31本をDVDへ媒体変換し、カテーテル手技等の歴史的な記録映像を保存している。

古医書コレクションとしては、医史学教授であった大鳥蘭三郎の旧蔵資料（大鳥文庫）の整理を進め、2009年にKOSMOS検索が可能となった。また、国内有数のコレクションである富士川文庫、石黒文庫を始めとする貴重な資料群も2014年の資料移動で外部書庫から当館の地下書架に戻した。2015年度には国文学研究資料館が中心となって推進する「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク事業」へ慶應義塾大学として参加し、富士川文庫のデジタル化が一気に進んだ。2017年現在、新日本古典籍総合データベースに833点、慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションのWebサイトに200点ほどを公開している。メディアセンターデジタルコレクションでは解剖学コレクションとして、大鳥蘭三郎旧蔵の『解体新書』、『解体約図』、各国語版の『ターヘル・アナトミア（クルムス）』も全文を閲覧できる。

9 むすび

80年の歴史を振り返り、今は最新情報から古医書まで、デジタル情報が瞬時にグローバルに流通する時代であることを実感する。かつて当館はアジア地域の医療情報活動に関して東南アジア等医療情報協力事業（SEAMIC）を通じて支援してきた歴史を持つ。2010年3月にドイツ医学中央図書館（ZB MED）とは互恵協定を結んだ。交流のあった数多くの海外機関や図書館員から得たものは大きい。国内ではJMLA加盟館とのつながりがあり、さらに身近な例として慶應義塾大学関連病院会の図書担当者連絡会の第1回会合を2016年10月に開催している。コンピュータを介した情報交換だけではなく、仲間

作りと情報共有、そして利用者との対話がいつの時代も図書館と私たち自身を支える土台であり、バックボーンとなるであろう。

注

- 1) 館田鶴子. 慶應義塾大学病院ひろばプロジェクト. Medianet. 2009, no.16, p.40-43.
<http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/016/01600400.html>, (参照 2017-08-31).

参考文献

- 1) 医学情報センター（北里記念医学図書館）. 慶應義塾大学医学部六十周年記念誌. 東京, 慶應義塾大学医学部, 1983, p.745-761.
https://books.google.co.jp/books?vid=KEIO1103692224&redir_esc=y. (参照 2017-08-31)